

産品
自慢

丹後藤布

(京都府)
京丹後市

先人の知恵と技術を受け継ぎ、現代の生活空間へ
丹後の山野が育んだ藤蔓が生みだす素朴かつ力強い織物



(上) 藤布を使って作られた能衣装「シケの水衣」。

(左) 藤蔓から糸をつくるには多くの工程を要する。枝の出いていない親指大の藤蔓を伐り、皮を剥いで、その中皮を灰にまぶして、長時間炊いた後、小川で洗い流して繊維を取り出す。それを細かく割いて、績んで長い糸にしていく。

(右) 藤布と絹を融合させた和装の帯



京都府丹後地方の織物といえば「丹後ちりめん」がよく知られています。これと並ぶ逸品に「丹後藤布」があります。藤布の歴史は非常に古く、縄文時代にまでさかのぼります。古来、人々は山野に自生する藤蔓の皮を剥ぎ、木灰で炊き、績んで（繊維を長くつないで糸にすること）衣服を織り、身にまとっていました。明治時代までは全国で織られていたことが、製造には大変な労力と技術を要することや、木綿の普及に伴い衰退し、藤布の文化は消滅したものとされていました。ところが、昭和三十七年、丹後地方でその製造が続いていることがわかり、以後、地元の人々を中心となって「丹後藤織り保存会」「丹後藤布振興会」を設立し、技術の伝承に取り組んでいます。

京丹後市網野町で明治時代より続く機屋「遊絲舎」を営む小石原将夫さん。もともとは、絹織物の帯を織っていました。が、織物の製造に携わる者として「衣服の原点である藤布を知らなければいけない」との思いから、その技術の保存に力を注ぐようになりました。技術を伝承していくために、藤布を製造していた丹後地方の山あいの集落に通い、そこで糸作りから織り方までの全工程を学びました。今では、絹との融合を図った織物など、現代の生活様式に合う製品の開発に取り組んでいます。現在、藤布の製品は和装の帯や草履をはじめ、座布団、照明器具のインテリアなど多岐にわたります。

また、藤布を世界に発信するため、経済産業省「JAPANブランド育成支援事業」の認定を受け、数年前からパリで展示会を開いています。藤布はその色合いや感触が評価され、フランスの高級ブランドから注目されるようになり、現在ではパリコレクションに出品する衣服の生地注文も入るようになりました。

さらに、藤を活用した地域おこしにも取り組んでいます。良質な藤の繊維を安定的に採取するため、昨年、京都府の「地域力再生プロジェクト支援事業」の認定を受け、藤布の一貫工程を行う施設「衣のまほろば『藤の郷』」を開園しました。将来的には作業が体験できる工房を設ける予定で、織物産業と観光資源を融合させる新たな試みとして注目されています。

「古代の衣」藤布は今、職人の手によって新たな息吹が与えられ、最高級の帯地素材として活躍しています。

●お問い合わせ先／木の布工房「遊絲舎(ゆうししゃ)」 TEL:0772-72-2677 <http://www.fujifu.jp/>